

明代における包公説話の展開

——「成化説唱詞話」を中心として——

根ヶ山 徹

一

北宋の仁宋朝にあつて、龍圖閣直學士や開封府尹を歴任した包拯について、『宋史』本傳（卷三一六）には、

拯立朝剛毅、貴戚宦官爲之斂手、聞者皆憚之。人以包拯笑比黃河清、童稚婦女亦知其名、呼曰「包待制」。京師爲之語曰、「關節不到、有閻羅包老。」舊制、凡訟訴不得徑造庭下。拯開正門、使得至前陳曲直、吏不敢欺。

中官勢族築園樹、侵惠民河、以故河塞不通、適京師大水、拯乃悉毀去。或持地券自言有僞增步數者、皆審驗劾奏之。

と記されており、清廉な裁判官として活躍したことは、歴史的事實として認められよう。しかしながら、元の雜劇や明の小説・傳奇等に、彼に纏わるものとして語られる説話は、盡く後人によって附會され、あるいは創作された

ものである。彼が天長知縣であった時の斷罪の記録として『宋史』本傳に残される紀事は、『折獄龜鑑』〔卷七には錢酥の事として記され、また『宋史』穆衍傳（卷三三二）にも同様の事件が記載されている。このように、包拯以外の人物に關しても同様の紀事が残されていることから、正史である『宋史』の紀事が果して本當に包拯の事跡であるのか大いに疑問視される所である。包拯の死後、彼に纏わるものとして創作され、民間にはぐくまれてきた説話は、數多くの人物の形象を承けて形成されたものであり、決して包拯一人をモデルにしたのではないと考へられる。⁽¹⁾

これら包公説話は、明代においては、成化年間に北京の永順堂から傳來の説書をテキストの形で出版した、所謂「成化説唱詞話」に八種が收められるのをはじめとし、萬曆二十二年（一五九四）、錢塘散人安遇時によつて編輯された『新刊京本通俗演義全像百家公案全傳』（以下『百家公案』と略稱）には百回九十七則が、また天啓・崇禎年間に刊行された『龍圖公案』には百則が輯録されている。これを説話の授受という點より見れば、「成化説唱詞話」所收の包公説話のうち、六種は、『百家公案』において、「包待制出身源流」、及び十四回十三則に分割して用いられ、更に『龍圖公案』には、『百家公案』からの四十八則にあわせ、萬曆期に相前後して上梓された『詳刑公案』『律條公案』『廉明公案』といった公案小説集からの三十七則の、都合八十五則が採録されている。このように時代が下るにともない、先行する説話を襲用したものに、新たに創作した説話や、既成の説話を包公説話に假託したものを加えて序々に説話數を増して行き、『龍圖公案』において明代における包公説話創作の一應の頂點を極めるに至る。そこで本稿では、如上の包公説話生成の過程のなかで、「成化説唱詞話」所收の包公説話が、明代における包公

説話の展開という視点から、更に視野を広げて宋人の話本に來源する包公説話の生成史上において、果してどのような位置を占めているかについて検討を加えてみたい。

二

「成化説唱詞話」には、次の八種の包公説話が現存する。

- A、新刊全相説唱包待制出身傳
 - B、新刊全相説唱包龍圖陳州糶米記
 - C、新刊全相説唱足本仁宗認母傳
 - D、新編説唱包龍圖公案斷歪烏盆傳
 - E、新刊説唱包龍圖斷曹國舅公案傳
 - F、新刊全相説唱張文貴傳卷上下
 - G、新編説唱包龍圖斷白虎精傳
 - H、全相説唱師官受妻劉都賽上元十五夜看燈傳卷上 全相説唱包龍圖斷趙皇親孫文儀公案傳卷下
- まず、これら「成化説唱詞話」の成立の先後を確認しておこう。刊記によれば成化七年（一四七一）から成化十四年（一四七八）にかけて上梓されたことがわかるが、ここでは成書の年代ではなく巷間での講唱文藝としての成立の先後について論じるものとする。趙景深氏によれば、A『包待制出身傳』²⁾は包拯の呼稱を「包待制」に作

り元曲での慣用に倣う、したがって他の「包龍圖」に作るものよりも古い、と論じられる。しかしながら「成化説唱詞話」の成立の先後は、包拯の呼稱によるのではなく、むしろ標題表記によって區別されるべきである⁽³⁾と考える。つまり標題を「新編」に作るD『斷歪烏盆傳』とG『斷白虎精傳』は古く、「新刊」に作るその他は新しいと考えられる。今、私がこのように推測する根拠として、以下に示すがごときいくつかの理由を挙げることができる。

まず、版式について考えてみることにする。標題を「新編」に作るものうち、D『斷歪烏盆傳』は、封面に「包龍圖斷」歪烏盆傳」と雙行に題し、その左右には「宗富屈死強徒手」不遇清官怎雪冤」、中心には「全相説唱詞話」、上欄には「永順堂新刊」と刻している。また卷末には「成化壬辰歲（一四七二）季秋書林永順堂刊行」なる刊記が残されている。G『斷白虎精傳』は、封面に「包龍圖斷」白虎精傳」と雙行に題し、左右には「虎精喫了張觀」龍圖勾到斬其身」、中心には「永順書堂新刊」と刻す。このようにこの二種は、標題を「新編」に作るものの封面には「新刊」と記すがごとく表記が一樣でない。包公説話以外の「成化説唱詞話」についても、『花關索傳』と『石郎駙馬傳』は、その標題を「新編」とする。そのうち「新編全相説唱足本花關索出身傳〔前集〕」の卷末刊記には「成化戊戌（一四七八）仲春」永順書堂重刊」と作っており、先行する版本の存在を豫測させる⁽⁴⁾。これはさきに掲げた包公説話二種についても該當するであろう。つまり「成化説唱詞話」では、「新編」という表記と「新刊」という表記は區別して用いられており、標題に「新編」と銘うったものは、先行するテキストを成化年間に再刻し、あるいは新たに封面を加えたと考えることができる。D『斷歪烏盆傳』の卷末刊記よりすれば、この書が成

化八年（一四七二）に再刻されたものであると推定できる。

次に、C『仁宗認母傳』、E『斷曹國舅公案傳』、F『張文貴傳』には、これらが語られていた當時、先行する「説唱詞話」が既に存在していたことを示唆する唱句が見え、その中にD『斷歪烏盆傳』とG『斷白虎精傳』が共に含まれていることが挙げられる。

.....	山里大蟲勾來到	古窯曾斷歪烏盆
街頭曾教林昭得	法場斬了魯皇親	明州曾斷陳通判
老鴉下狀甚分明	諸山曾斷孫廟鬼	也曾空裏斷狂風
斷了負心郎七姐	三瓜團魚是煞精	正宮曾斷曹皇后
一牢斷了兩家人	斷得崔護爲夫婦	曾斷孫焦一個人
.....	在朝曾斷陶國丈	鄭州曾斷魯官人
.....	也曾窯內斷烏盆
.....	曾勾大蟲償人命

(E『斷曹國舅公案傳』)
(F『張文貴傳』)

「古窯曾斷歪烏盆」「也曾窯內斷烏盆」とはD『斷歪烏盆傳』のことを指すであろうし、「山里大蟲勾來到」「大蟲勾來償人命」「曾勾大蟲償人命」とはG『斷白虎精傳』のことを指すであろう。ちなみにC『仁宗認母傳』は、A『包待制出身傳』、B『陳州糶米記』と合刊されており、内容的にも連続するものであるから、ほぼ同時期に成立したと考えて差し支えあるまい。とすれば、DはA、B、C、Eに先行し、GはA、B、C、E、Fに先行する

と考えられよう。

第三に、それぞれの話の冒頭の唱句、特に仁宗皇帝と包拯の描寫について考えてみることにする。ここでも時と共に描寫の仕方が推移しており、とりわけD『斷歪烏盆傳』とG『斷白虎精傳』の二種は別趣である。

…………… 太祖太宗眞宗帝 四帝仁宗有道君

四十二年眞命主 佛補天差治萬民 王有道時臣有德

至今朝内出賢人 文官只說包丞相 武官只說狄將軍 (D『斷歪烏盆傳』)

…………… 太祖太宗眞宗帝 四帝仁宗有道君

四十二年眞命主 佛補天差治萬民 王有道時臣有德

至今朝内出賢人 文官只說包丞相 武官好個姓楊人 (G『斷白虎精傳』)

ここでは、仁宗皇帝は佛菩薩と天帝の派遣輔佐を受けた有道の君主であると言ひ、その有徳の臣下として文官では包拯、武官では狄青、あるいは楊文高の名前が擧げられている。

一方、D、G以外では形容の仕方がいささか異なっている。

B『陳州糶米記』では、

太祖太宗王有道 眞宗三帝改咸平 四帝仁宗登寶殿

佛保天差羅漢身 仁宗七寶眞羅漢 二班文武上方星

文官護國金籬帳 武將江山玉版門 ……………

明代における包公説話の展開(根ヶ山)

と云つて、仁宗皇帝は羅漢の化身、文武の官は天上の星の生れ變りと記している。既述のとおりBはA『包待制出身傳』、C『仁宗認母傳』と同時期の成立と考えられ、Aの、

.....
文有清官包待制

武有西河狄將軍 但是兩班文共武 創立仁宗定太平
という唱句よりすれば、前掲Bに言う「二班文武」とは包拯と狄青を指すであらう。

E 『斷曹國舅公案傳』でも同様に記される。

太祖太宗眞宗帝 四帝仁宗有道君 仁宗七寶眞羅漢
兩班文武上方星 年登十二交王位 專靠朝中武共文
文官只說包丞相 武官好個狄將軍 只爲兩班文武好
創立仁宗致太平
.....

F 『張文貴傳』の場合、

太祖太宗眞宗帝 四帝仁宗有道君 四十□□□□□□
經過幾度拜郊恩 十度拜郊三十載 四拜□□□□□□
王有道時臣有德 至今朝內出賢人 文官□□□□□□
武將江山玉版門 (中略)
殿前四百文和武 盡是天官降下星 文□□□□□□□□

と言ひ、殿前に控える文武の官は皆な星官の轉生であると叙す。

H 『斷趙皇親孫文儀公案傳』では、

…………… 太祖太宗眞宗帝 四帝仁宗有道君

仁宗七寶眞羅漢 佛補天差治萬民 ……………

…………… (中略) …………… 怎見君王多有道

駕前文武説交眞 文曲星官包丞相 武曲星官狄將軍

と言つて、仁宗皇帝についてはBやEのごとく羅漢の化身であると言ひ、包拯と狄青についてはそれぞれ文曲星、武曲星の轉生であると言つている。

以上のように、D 『斷歪烏盆傳』とG 『斷白虎精傳』の二種は他に先行して成立し、成化年間に再刻されたものであること、また「成化説唱詞話」の包公説話全般にわたつて、仁宗皇帝の治世のもとの輔弼の臣下として文官では包拯、武官では狄青、あるいは楊文高が擧げられているけれども、この文武兩班の官についても時代が下るにつれ、星官の轉生として、更に具體的には文曲星と武曲星の轉生として描かれていることがわかる。⁽⁵⁾

三

「成化説唱詞話」における包拯は、仁宗皇帝輔弼の臣下として、更には文曲星の轉生として位置づけられている。それでは「成化説唱詞話」に至るまでの包公説話において包拯はどのように描寫されているのだろうか。

明代における包公説話の展開(根ヶ山)

宋人の話本では包拯には特別の位置づけはなされていない。ここでは、むしろ事件の推移や顛末の描寫に多く關心がかけられ、包拯自身の描寫にも、包拯による裁判の場面にも、さまざま委曲を盡くさぬ⁽⁶⁾。

『清平山堂話本』に收められる「合同文字記」では、家産分配を記した證文を伯父劉添祥夫婦に奪われた劉安住が、許嫁の父親であり證文の證人でもある李社長に付き添われて開封府廳に訴え出るところではじめて包拯が登場する。

當日歇了一夜、至次早、安住逕往開封府告包相公。相公隨即差人捉劉天祥并晚婆婆來、就帶合同、一併赴官。又拘李社長明正。當日、一干人到開封府廳上。包相公問「劉添祥、這劉安住是你姪兒不是。」老劉言「不是。」

劉婆亦言「不是。既是親姪兒、緣何多年不知有無。」包相公取兩紙合同一看、大怒、將老劉收監問罪。安住「告相公、可憐伯伯年老、無兒無女、望相公可憐見。」包相公言「將晚伯母收監問罪。」安住道「望相公只問孩兒之罪、不干伯父伯婆之事。」包相公交將老劉打三十下。安住「告相公、寧可打安住、不可打伯父。告相公、只要明白家事、安住日后不忘相公之恩。」包相公見安住孝義、發放各回家「待吾具表奏聞。」朝廷喜其孝心、旌表孝子劉安住、孝義雙全、加贈陳留縣尹、全劉添祥一家團圓。包相判畢、各自回家。

また元代の成立とされる『醉翁談錄』の壬集卷一「負心類」に收められる「紅綃密約張生負李氏娘」でも、包拯には物語の結末を團圓に導く副次的な役割しか與えられていない。すなわち、李節度使の偏室李氏と出奔した張生は三月も経つと食うに事欠くありさま。金策のため父親の秀州知府を尋ねるも不義を許してもらえず追い返されてしまふ。困惑する張生に妓女梁越英は金錢の援助を申し出、また張生は梁越英の美貌にひかれ、かくて二人は婚姻

をとり結ぶ。一方、これを聞き知って張生の負心に怒った李氏は侍女彩雲と共に包拯に訴える。

於是三人共爭、以彩雲爲證、遂告於包公待制之廳、各各供狀、果是張資之負心、遂將其繫於廳監。張資責娶李氏爲正室、其越英爲偏室。

いづれも包拯個人に關して特別の記述は行われておらず、ことさらに包公説話と呼ぶに値しないように思われる。

次いで元の包公戲における包拯には、例えば『包待制三勘蝴蝶夢』劇のように、夢の示唆によって判決を導き出したり、『包待制智勘後庭花』劇、『包待制智賺生金閣』劇、『神奴兒大鬧開封府』劇、『玳瑁瑤盆兒鬼』劇のように、亡靈から直接訴えを聞いて判決を導いたりするという超人的な才能が附與されてくる。劇中においても、包拯に對して次に掲げる部分のように、『清平山堂話本』や『醉翁談錄』には見ることでできなかった形容が行われている。

『包待制智賺生金閣』劇の第四折、龐衙内に殺された郭成の亡魂のせりふ、

也是千難萬難得見南衙包待制、你本上天一座殺人星。除了日間、剖斷陽間事、到得晚間、還要斷陰靈。只願老爺懷中高揣軒轅鏡、照察我這悲悲痛痛、酸酸楚楚、說無休、訴不盡的含冤負屈情。

『永樂大典』卷一三九九一に收められていた戲文『小孫屠』第二十一出、包拯が登場する場面での唱とせりふ、

〔七娘子〕判斷甚嚴明、受人間陰府幽冥。負屈銜冤、從公決斷、心無私曲明如鏡。

(白) 人間私語、天聞若雷。包拯便是。奉勅命雲間下、勅判斷開封。日判陽間、夜判陰、管取人人無屈、定教個

個無冤。

この幕では、孫家の梅香を殺したうえ、孫必達・孫必貴兄弟を官權を利用して故なく投獄した朱邦傑と李瓊梅を包拯が凌遲の刑に處することで事件が結着する。

また『小張屠焚兒救母』劇（『古今雜劇三十種』）は、包公戲とは言い得ないが、第三折には包拯のことを次のように稱揚する。

（正末云） 娘娘、那裏有個神靈、在生時是包待制、死後爲神、速報司是也。

〔三煞〕 那爺爺曾扶的社稷安、補完天地窄、穿一領紫羅袍、手秉着白象簡、腰繫着黃金帶。那爺爺睜雙怪眼烏雲黑、兩鬢銀絲雪練白。那爺爺威風整神通大、斷陰司能驅鬼使、判南衙不愛民財。

『包待制智勘後庭花』劇の第四折には、包拯の唱に同様の唱句を見出すことができる。

〔呆骨朵〕 兀的是自作自受身當罪、（云）張千、（唱）你把殺人賊快與我勾追。（張千云）着小的去勾喚誰。

（正末唱） 你排門兒則尋那宜入新年、我手裏現放着長命富貴。這言語表出人凶吉、這桃符泄漏春消息。怎瞞那掌東嶽速報司、和這判南衙包待制。

この、包拯が東嶽の速報司であったという記述は、古くは『續夷堅志』卷一「包女得嫁」の條に、「世俗傳包希文、以正直主東嶽速報司。山野小民無不知者。」と記されており、俗傳として傳えられていたものを繼承したと考えられよう。また包拯の特異な才能を形容する「日判陽間夜判陰」ということばは、『宋史』をはじめとして宋代の劄記類の、貴戚宦官を畏れず惡辣な胥吏にも嚴正な態度で臨んだ清廉な官吏であった、という記述と相俟って形

成されたと考えられる。

こうした包拯の才能に關する形容は、以後、明末の『龍圖公案』にまで受け繼がれて行き、「成化說唱詞話」ではこれに加えて、仁宗皇帝は佛菩薩と天帝の派遣輔差を受けた有道の君主、あるいは羅漢の化身として、また包拯は文曲星の轉生、狄青は武曲星の轉生として描かれるのである。

ところで、仁宗皇帝についての敘述に附隨した包拯や狄青の名前の併記は、『水滸傳』引首にも見ることができ、當時ワンセットにして語られていたようである。

這仁宗皇帝、乃是上界赤脚大仙。降生之時、晝夜啼哭不止。朝廷出給黃榜、召人醫治。感動天庭、差遣太白金星下界、化作一老叟、前來揭了黃榜、能治太子啼哭。看榜官員引至殿下、朝見眞宗天子。聖旨教進內苑、看視太子。那老叟直至宮中、抱着太子、耳邊低低說了八個字、太子便不啼哭。那老叟不言姓名、只見化一陣清風而去。耳邊道八個甚字、道是「文有文曲、武有武曲。」端的是玉帝差遣紫微宮中兩座星辰、下來輔佐這朝天子。文曲星乃是南衙開封府主龍圖閣大學士包拯、武曲星乃是征西夏國大元帥狄青。這兩個賢臣、出來輔佐。

ここでは仁宗皇帝は赤脚大仙の轉生であると明記し、その誕生にあたっては晝夜泣きやまず、天宮から遣わされた太白金星が老人に姿をかえて朝廷に祇候し、太子の耳もとで「文に文曲有り、武に武曲有り」と囁いたとたん泣きやんだ。文曲星の包拯と武曲星の狄青がそれで、玉帝によって紫微宮の二つの星が仁宗皇帝を輔佐すべく差向けられたものであると言っている。

ちなみに仁宗赤脚大仙轉生の故事は、馮夢龍の増補にかかる『平妖傳』四十回本の第十四回「聖姑宮紙虎守金山

淑景園張鸞逢媚兒」にも見ることができらる。

張鸞在江湖上打聽得眞宗所生皇子、今已長成、那皇子乃是赤脚大仙轉生。怎見得。原來眞宗二十一歲上登基、宮中尙無皇嗣。乃御制祝文、頒行天下、令各處名山宮院、修齋設醮、祈求上帝。時玉帝正與群仙會聚、問誰人肯往、群仙都不答應。只有赤脚大仙笑了一笑、玉帝道「笑者未免有情。」即命降生宮中、與李宸妃爲子。生後、晝夜啼哭不止。便御榜招醫、有個道人向內侍說「貧道能止兒啼。」眞宗召入宮中、抱出皇子、叫他診視。道人向皇子耳邊說道「莫叫、莫叫、何似當初莫笑。」皇子便不哭了。眞宗大喜、問其緣故、道人說此情由已罷、出得宮門、化陣清風而去。這皇子是誰。便是四十二年太平有道的仁宗皇帝、他在宮中。只好赤脚、再不愛穿鞋襪、此其驗也。眞宗因感齋醮靈應、愈加信奉、各處修復道家廟宇。

すなわち、眞宗皇帝の求嗣の祈願に對して玉帝は赤脚大仙を李宸妃に感孕させ、仁宗皇帝が誕生したと言うのである。ここでは、仁宗皇帝降生の経緯について『水滸傳』引首よりも詳しく敘述されているが、堀誠氏はこの仁宗皇帝赤脚大仙轉生説が、南宋の張端義『貴耳集』卷中所載の故事や王明清『揮麈後録』卷一「昭陵降誕之因」の條に淵源するものであることを指摘する。⁽⁸⁾

四

『水滸傳』引首には、仁宗皇帝は赤脚大仙の轉生であり、包拯は文曲星の、また狄青は武曲星の轉生であるとするほかに、泣きやまぬ仁宗皇帝のために天宮から「太白金星」が派遣され、仁宗皇帝を輔佐するために「玉帝」が

紫微宮の二星を遣わしたとの記述があり、仁宗皇帝、包拯（狄青）、太白金星、玉帝の四者には何らかの関係が存在することを示唆していた。『水滸傳』に先行する「成化説唱詞話」にもこの「太白金星」や「玉帝」が登場し、しかもここではストーリー展開のうえで重要な役割を果しているのである。この章では、包公説話生成の過程におけるこれら虚構成分の受容と發展の経過について、「成化説唱詞話」と、後行する『百家公案』や『龍圖公案』との比較を行いながら考察を進めて行きたい。

「成化説唱詞話」において「太白金星」が登場するのは、A『包待制出身傳』、E『斷曹國舅公案傳』、H『斷趙皇親孫文儀公案傳』の三種、「玉帝」の登場するのはF『張文貴傳』であり、第二章で、成立が古く成化年間に再刻されたものであることを推定したD『斷歪烏盆傳』とG『斷白虎精傳』には登場しない。これは「成化説唱詞話」成立の先後を知るうえでいま一つの手がかりとなろう。

・それではまず「太白金星」の役割について検討することにする。

A『包待制出身傳』では、「八分像鬼二分人 面生三拳三角眼」「一雙眉眼性雙輪 頭髮粗濃如雲黑 兩耳垂肩齒假銀 鼻直口方天倉蒲 面有安邦定國紋」と描寫されるように、異様な容貌をもって生れたがために、包十萬と綽號される父親から冷遇され、新年早々耕田に従事させられる境遇を悲歎する包拯の前に、「太白金星」が易者に姿をかえて登場し、前途洋々たることを占って勵ます。

……………〔説〕包太公差大兒去遠處親戚家還禮、

第二個兒去近處親戚家還禮、第三個冤家無處差遣。〔唱〕

明代における包公説話の展開（根ヶ山）

暫時好衣都脫了 南莊去做使牛人 南莊水田耕不了

晚西不得轉莊門 膽小三郎親聽得 低頭眼淚落紛紛

肩上馱犁牽牛去 南莊去做使牛人 去到南莊田□□

驚動雲中太白星、當時差神來下界 替他去作使□□

〔說〕三郎困懶、把犁作枕頭、就田塍上睡。不覺睡着醒時□□

田耕了。……………

賣卦先生、三郎作揖問「郎君高姓。」三郎道「姓包、排行第□□□□。」

問「此到廬州有多少路。」答曰「百八十里。」先生道「你不算命。」三郎

說「我被爺々罰在南莊使牛、有甚好處、無錢算命。」先生說「你交_(教)

我廬州路、我與你看命。郎君甚年月日。」郎君說與先生「淳化三

年二月十五日卯時生。」〔唱〕 先生聽得郎君說

一個時辰不做聲 三郎又手前來問 賣□先生欺負人

〔說〕三郎道「我交_(教)你看命、如何不說。」先生答「君□□性急。」〔唱〕

既是卯年并卯月 又逢卯日卯時辰 □□四個卯生下

卅二上濠州爲縣宰 卅四上陳州治良民 □□上治開封府

日斷陽間夜判陰……………(中略)……

……
辭了郎君行數步 乘雲去步上天門

雲端之中高聲叫 叫言文曲姓包人 我不是凡人□□

我是南方太白星、

「叫言文曲姓包人」なる唱句は、包拯が文曲星の轉生であることを前提にしたものと看取され、「太白金星」は包拯の庇護者としての役割を擔っている。

『百家公案』の「包待制出身源流」では、右に掲げた部分を次のように敘し、易者は登場するものの「太白金星」の化身とは明記されない。

太公於席上分付着令「……三郎換了衣服、前往南莊使牛、直待水田耕得完了、方許回來。」分付畢、大郎・二郎各去不顧。只有包公煩惱、獨自一個將牛來南莊耕水田、自嗟自嘆、不覺困倦、睡于田塍上。原來包公是個好人、自然有神明來助他。……回家行到中途、遇着個算命先生、見包公作揖云「煩問往廬州還有多少路程。」包公云「尙有一百八十里。」先生見包公形狀特異、與人不同、暗想這人有貴相、因問云「君是何處人氏、敢乞貴造一看。」包公答云「小可廬州離城十八里巢父村人。被父親遺令南莊耕田、只是傭工人、有甚好處、無錢算命、免勞先生看。」先生笑云「你教我路境、不要命錢、且說來看看。」包公乃云「賤造是淳化二年二月十五日卯時生。」先生遂起了八字看畢、大驚云「郎君之命、辛卯年辛卯月辛卯日辛卯時、有四個辛卯、三十二上發科、後去官至學士、後爲龍圖閣待制、故人稱爲包龍圖、乃大貴之命也。可賀可賀。」……那先生化一陣清風而去。

ちなみにこの包拯の發跡變泰の物語は、「成化說唱詞話」以前には見ることができず、恐らくここではじめて創

作されたものと思われ、以後『百家公案』を経て、清代の『三俠五義』まで受け継がれて行く。

次に、E『斷曹國舅公案傳』の場合、以下に示す物語の進展を経て「太白金星」が登場するように構成される。

潮州潮水縣鐵丘村の袁文正は應試のため妻子を伴って東京にやって来た。親子三人で町を見物している所に曹國舅兄弟が通りかかり、袁文正の妻張氏を見初め、これを我物にしようと思う。そこで袁氏一家を自邸に招いて袁文正と子供を殺し、張氏は鄭州に連れ去る。袁文正の冤魂は包拯の前に現われて曹國舅兄弟の悪事を訴え、一方、曹國舅兄弟は事の露顯を恐れて張氏殺害を命ずるが、これを憐んだ張公は私かに張氏を逃がしてやる。

..... 婦人拜謝公公去

來生世上不忘恩 巴得五更天色曉 將身使出鄭州城

脚小鞋尖唯行走 野風吹得面皮紅 婦人思想家鄉事

哮喘痛哭兩三聲

婦人正在忙忙哭 驚動上方太白星 此人不是凡間人

他是蓬來洞裏仙 太白金星遙觀見 化作凡間一老人

羊頭車兒推一輛 路傍迎見婦人身

..... 婦人上了車兒坐

合掌高臺向頂門 公公便推車兒走 城隍土地盡催行

魔王睡着裙釵女 車兒推在半虛空 騰雲駕霧如箭走

一時來到大東京 雲頭放下裙釵女 太白金星、不見宗
婦人睡惺臺頭看 不見公公年老人 望見東京高十丈
このあと張氏は、曲折を経ながらも包拯に訴冤するのであるが、ここでは、「太白金星」は張氏の庇護者として
助力し、張氏と包拯とを結ぶ働きを負う。

この部分は、『百家公案』第四十九回「當場判放曹國舅」や、『龍圖公案』卷七「獅兒巷」にもそのまま繼承さ
れ、共に「太白金星」も登場する。以下の引用は『百家公案』に據る。

張氏拜謝、出得門來。他是個閨門女子、獨自如何到得東京、悲哀感動太白金星化作一老翁、直引他到東京了、仍
成清風而去。

H 『斷趙皇親孫文儀公案傳』では、次の場面に至って「太白金星」が登場する。

..... 裙釵坐在香房內
雙行珠淚落紛紛 思想孩兒師金保 義想親夫結髮恩
幾時見得兒夫面 與奴做個報仇人
..... 一口怒氣透天門 太白金星遙觀見
下方去救姓師人 三聲喝道將身變 化作蕉苗一個蟲
着地飛入香房裏 直奔衣裳架上存 裙子襖兒多咬碎
金星、菩薩上天門

明代における包公説話の展開（根ヶ山）

.....
拿起襖兒都咬碎 裙兒咬得碎紛紛

.....
蟲兒咬破衣和服 想起前情夫主身

母親の忠言に背いて燈籠見物に出かけたがため趙皇親に囚われの身となったことを嘆き、夫師官受や子供金保のことを思っていると、「太白金星」が蟲と化して劉都賽の服を咬み破り、錦織の職人として趙皇親に招かれた夫との再會が適う。しかしこのあと師官受をはじめ師家の一族郎黨は皆殺しにされ、かろうじて命をとりとめた師家の下僕張某が金保を抱いて開封府に訴冤し、包拯が事件を知る。ここでの「太白金星」には、劉都賽を師官受と再會させるといふ役割が與えられており、その結果として師家一族は皆殺しにされるが、同時に包拯に事件が露顯することになる。

この部分は、『百家公案』第四十八回「東京判斬趙皇親」においてもそのまま繼承される。

劉娘子雖在王府享富貴、朝夕思憶婆婆丈夫兒子、只悔當初不聽婆婆言語、惹出此禍、恨氣觸天、有太白星要教他與前夫相會一面、變做個蕉苗小蟲、飛入劉娘子房中、將他穿那一套織成萬象衣服都咬碎了。

ところが、『龍圖公案』卷二「黃菜葉」に至ると、老鼠が劉都賽の服を咬み破ったとされ、「太白金星」は消滅している。

劉娘子雖在王府享富貴、朝夕思憶婆婆丈夫兒子。忽有老鼠、將劉娘子房中穿那一套織成萬象衣服都咬破了。

このほか、既佚の林招得のものを取扱った物語にも「太白金星」が登場したと推定され、この話を素材にしたと考えられる『百家公案』第七十八回「兩家願指腹爲婚」にもそのまま繼承されている。

招得忽日遇着太白星、變作老人、手擎一隻白雀、賣與招得。招得籠養于家、一日白雀飛去、直入張員外花園中。

以上のように、「成代説唱詞話」に登場する「太白金星」は、A『包待制出身傳』では包拯の庇護者としての役割を、またE『斷曹國舅公案傳』、H『斷趙皇親孫文儀公案傳』では被害者のために助力し、更に包拯の明斷によって事件の解決をはかるべくストーリーの進展に轉機をもたらす役割を擔っている。つまり「太白金星」は、「成化説唱詞話」の新しい段階の説話で、仁宗皇帝を輔佐すべく天上から派遣された文曲星の轉生とされる包拯を、更に輔佐するための存在として位置づけられていると考えられよう。『百家公案』でもこの「太白金星」はおおむねそのままの形で受け継がれている。しかしながら『百家公案』の場合、「包待制出身源流」に「上界文曲星來東京求官」と記されるものの、素材は雑多であり、包拯の位置づけにも統一を缺く。したがって「太白金星」の位置づけも不明瞭で、存在意義は希薄となり、その唐突な登場には違和感さえも受ける。『龍圖公案』に至ると、「太白金星」の存在は積極的に編者の意識にのぼせられておらず、H『斷趙皇親孫文儀公案傳』が「黃菜葉」に繼承されるに及んで、「太白金星」が老鼠にとってかわられるがごとく、消滅するものさえある。これは『百家公案』と『龍圖公案』の二書が、既成作品の援用に基ついて編纂されていることによる。

さて「成化説唱詞話」に現われるいま一つの虚構成分「玉帝」について考えて行くことにしたい。

次に掲げるF『張文貴傳』では、張文貴が趙太保の娘青蓮公主から譲り受けた碧玉帶・逍遙瓶・溫涼盞という三つの寶物を楊都知に奪われたうえ殺され、その死を嘆き悲しむ張文貴の飼馬の哭声を「玉帝」が聞きつけ、神兵達を派遣して張文貴の死屍を發き出すという場面が挿演される。

……………
且唱龍駒馬有恩 自從絞死張文貴
如常眼淚落紛紛 只在園中頻嘶叫 無人知得事和因
每日園中常下淚 聲聲只哭姓張人 你在此間遭屈死
使頭家內望回呈 東園跑到西園去 南園跑到北園去
日日園中長叫屈 上方玉帝早知聞 玉帝便差星官看
看見園中屈死人 乃是西京張文貴 半年屈死喫艱辛
因此馬兒長長叫 畜生也有好心情 玉皇大帝傳宣救
急宣上界衆神兵 衆神此時蒙宣召 下方去救姓張人
風伯雨師歸下界 雷公電母便行呈 興動黑風并黑雨
括地翻砂吹倒人 太公吹得搖搖動 小山吹得一齊平
屋上瓦飛如燕子 大樹連梢要見根 大風猛雨皆不住
東京人戶盡受驚 落了三日并三夜 園中洗出姓張人
洗見屈死張文貴 雨過雲開依舊晴 不唱天神歸上界

このあと龍駒馬が張文貴の死屍を荷って包拯の役所に行き、事件が発覚するという構成になっており、「玉帝」の登場によってこの物語は轉機をむかえる。

この物語は『百家公案』には繼承されないけれども、『百家公案』にも「玉帝」の登場する話は收められている。

次に掲げるのは第五十八回「決戮五鼠鬧東京」である。ここでは、神通變化する五匹の鼠を退治するために、包拯が死後の世界に赴いて「玉帝」に奏上し、助力を乞う。

拯取衣領邊所塗孔雀血、謾嚼幾口、拯便死去、那靈魂直到天門、天使引見玉帝、奏其事。玉帝聞奏、命檢察司曹查究何孽爲禍。

第二十九回「判劉花園除三怪」では、次のように描寫される。

……（包公）再喚張龍・趙虎二人分付曰「今有潘松所告、劉評事花園內三妖爲禍、白日迷人。汝可去後堂、與吾將前張月桂所付赴、陰床、與那溫涼、還魂枕、收拾得乾淨、待我寢臥其上、前往陰司、查考是甚妖爲害、吾誓除之。」張・趙依言收拾已了、請包公寢在牙床之上。……移時之間、包公魂魄來到地府、先使人通報、閻王聞報文、曲星官到此、遂親下殿接入、分賓主坐定間、閻王問道「今蒙星官親臨冥境、不知有何見諭。」包公曰「今有新安縣潘松狀告、劉評事花園內三怪爲禍、……」

劉評事の花園に現われる妖怪に幻惑された潘松を救うために、包拯はまず「赴陰床」に臥して冥府に赴き、閻王に妖怪退治を願う。しかし、この妖怪の神通力は廣大で、「玉帝」の力をもつてしなければ除害は不可能との返答を得て、「還魂枕」を用いて一旦現世に戻り、齋戒沐浴して「玉帝」に奏上し、かくて除害がかなう。それが、次に引用する部分である。

隨即齋戒沐浴、焚香具表、奏聞玉帝。玉帝聞奏、與衆文武議曰「朕觀文、曲星下界、爲官清正、鬼神欽仰。今下方有怪、如此害民、宜即殄滅。」

明代における包公説話の展開（根ヶ山）

このように、『百家公案』では、「玉帝」と包拯との関係が密切であり、F『張文貴傳』で直接の関係をもたず、もっぱら間接的であったのは異なり、事件解決のため積極的に關與してくるようになる。

さらに、『百家公案』第二十九回「判劉花園除三怪」に見ることのできた、包拯が「赴陰床」に臥して冥府に赴くというプロットは、『龍圖公案』において、「付陰床」に臥して幽冥界の事を斷ずるといふ、所謂冥間斷獄の話として類見する。次に掲げる卷六「玉猫」は、前掲『百家公案』第五十八回「決戮五風鬧東京」を素材にしたもので、「付陰床」に臥すという一段が加えられている。

遂取領邊所塗孔雀血、謾嚼幾口、臥付陰床上、直到天門。天使領見玉帝、奏知其事、玉帝聞奏、命檢察司曹查究何孽爲禍。

また卷九「鹿隨獐」では、大田縣高村坡の枯蹄嶺で客商を殺した犯人を明らかにするため「付陰床」に臥す。

包公道「我日斷陽間、夜斷陰間。這件事陽間不得明白、我要向陰間討個眞實消息。」便登了付陰床、叫陰司手下人、分付道、……

この話の素材である『詳刑公案』搶規類「吳推府斷僻山」、『律條公案』強盜類、同上には「付陰床」に臥す場面はない。

卷十「玉樞經」には、

(玉帝)分付道「那包拯雖爲陽官、實兼爲陰職、可攝其精靈。」天兵乘馬持鎗、雷神揮火持斧、同往託夢包公、令登付陰床偕行。

と言って、「玉帝」に命じられた天兵・雷神が包拯を「付陰床」に臥さしめて妖蛇の棲む古廟に行く、という場面が現われるが、素材の『評刑公案』除精類「鄭知府告神除蛇精」、『律條公案』同上にはない。

このほか『龍圖公案』編者の手に成ると考えられる十二則の冥間斷獄の話のうち、卷三「忠節隱匿」、同「巧拙顛倒」、卷八「侵冒大功」、卷十「屍數椽」にも包拯が「付陰床」に臥す場面が描かれる。

ちなみに清初の朱佐朝等による傳奇『四奇觀』(佚?『曲海總目提要』卷二十五に著録)にも、包拯が「伏陰枕」「溫涼帽」「赴陰床」「照妖鏡」といった寶物を用いて、幽冥界のことを能く斷ずるという内容が挿演されていたことが知られる。

以上のごとく、「成化說唱詞話」に現われた「玉帝」の、『百家公案』や『龍圖公案』に及ぼした影響は濃厚で、「成化說唱詞話」では「玉帝」は天上の、包拯は現世の存在として描かれていたものが、時間の経過にしたがって包拯には現世と幽冥界を、つまり下界と天上とを往き來する能力が附與されてくる。思うにこれは、F『張文貴傳』における「玉帝」の登場と、元の包公戲以來包拯の特異な才能を形容する「日判陽間夜判陰」ということばとが相俟って、『百家公案』や『龍圖公案』に發展的に繼承され、包拯の超人的能力を具現したものである。

五

以上に述べたように、「成化說唱詞話」に收められる包公説話は、成立の新舊をもって大まかに二分することができた。成立の時期について考えてみると、古い段階の説話であるD『斷歪烏盆傳』が元の包公戲『玳瑁瑤盆兒鬼』

明代における包公説話の展開(根ヶ山)

劇と同趣向であることからすれば、元の包公戲を承け、あるいは相互に連關しながら生成したと思しく、その成立は元末明初まで溯ることができる。一方、新しい段階の説話は、それ以降、成化年間に至る間の成立と推定できよう。

また古い段階の説話では、包拯は仁宗皇帝輔弼の有徳の臣下として位置づけられていたものが、新しい段階のそれでは、仁宗皇帝を輔佐するために天上から派遣された文曲星の轉生であると規定され、その前提に基づいて物語の中に「太白金星」や「玉帝」といった虚構の存在が登場し、ストーリーの展開を容易なさしむるように仕組まれている。ちなみにこうした虚構成分は『水滸傳』にも出現しており、當時の風潮であったということができであろう。すなわち『水滸傳』では、張天師は天子の顧問、羅真人は公孫勝の師匠、九天玄女は天魁星の轉生である宋江の庇護者として位置づけられるほか、昆沙門神の化身である托塔天王晁蓋をもって天罡星三十六員と地煞星七十二座、つまり梁山泊の豪傑全員の庇護者にあて、それを前提として彼らが北宋の徽宗朝に一大波亂を巻き起こす物語が展開されているのである。

こうした風潮に倣った「成化説唱詞話」を承けた『百家公案』では、これらの虚構成分を發展的に繼承して新たな展開を呈し、更に『龍圖公案』に至って、明代における包公説話の創作は一應の終息をむかえる。その後清代に至り、評書として再び息を吹き返すのである。とまれ、明代における包公説話の展開という視點よりすれば、「成化説唱詞話」における虚構成分の出現を契機にして、後發の『百家公案』や『龍圖公案』の受けた影響は深刻なものがあり、「成化説唱詞話」所收の包公説話の、包公説話生成史上における意義は、甚大なものがあつたとしななければならない。

註

- (1) 大塚秀高氏「包公説話と周新説話——公案小説生成史の側面——」(『東方學』第六十六輯、一九八三)。
- (2) 「談明成化刊本『説唱詞話』」(『文物』一九七二年第一期、一九七二)。
- (3) 尾上兼英氏「『成化説唱詞話』試論(一)——『花關索傳』をめぐって——」(『東洋文化』第五十八號、一九七八)にも「『新編』と『新刊』は區別があつたという感じを與える。」と言われる。
- (4) 『花關索傳』は四集とも封面を缺く。また『石郎駙馬傳(新編説唱全相石郎駙馬傳)』の封面は、「新刊全相」石郎駙馬」と雙行に題し、左右に「善惡到頭終有報」只爭來早與來遲」、中心に「説唱詞話傳」と刻す。卷末には「成化七年(一四七二)仲夏永順書堂新刊」という刊記がある。
- (5) 澤田瑞穂博士「『四帝仁宗有道君』——明代説唱詞話の開場慣用句について——」(『中國文學研究』第四期、一九七八)には、「包公案關係の説唱詞話には、まるで約束でもあるかのように四帝仁宗が持ち出され、その有道と天下太平とが稱えられること、また『四帝仁宗有道君』の決り文句のほか、補佐の名臣として『文官只説包丞相、武官只説狄將軍』と包拯と狄青が擧げられ、(中

明代における包公説話の展開(根ヶ山)

略)つまり包公案を語るためには、その時代背景として仁宗皇帝とその治世の太平とを説くことが必須の前提とされていたのである。」とされる。

(6) 岩城秀夫博士「元の裁判劇における包拯の特異性」(『中國戲曲演劇研究』、創文社、一九七三、所收)。

(7) 『警世通言』卷十三「三現身包龍圖斷冤」にも「包爺初任、因斷了這件公事、名聞天下、至今人説包龍圖、日間斷人、夜間斷鬼。」ということが見え、宋元時代の作とされているが、馮夢龍によって増改が加えられていることが予測されるのでここには加えなかつた。

(8) 「四帝仁宗出生故事考——赤脚大仙轉生の話——」(『中國詩文論叢』第一集、一九八二)。

(9) この劇の第四折に、「你白日斷陽間、到得晚時、又把陰司理、也曾三勘王家蝴蝶夢、也曾獨糶陳州老倉米、也曾智賺灰鬪年少兒、也曾詐斬齋郎衙内職、也曾斷開雙賦後庭花、也曾過還兩紙合同筆」とあり、この劇の成立は如上の諸劇におくれ、時代も下るものと考えられる。

〔附記〕本稿は、一九八六年五月二十四日、山口大學で開催された中國四國地區中國學會での研究発表に基づいてまとめ直したものである。

(附表)

△元雜劇▽

△成化說唱詞話▽

△龍圖

玳瑁瑣盆兒鬼

D 斷歪烏盆傳

87 瓦盆子叫屈之異

烏盆子

G 斷白虎精傳

A 包待制出身傳

包待制出身源流

79 勘判李吉之死罪

80 斷濠州急脚王眞

81 斷劾張轉運之罪

82 劾兒子爲官之虐

83 判張皇妃國法失儀

84 判趙省滄州之軍

85 決秦衙內之斬罪

72 除黃二郎兄弟刁惡

73 包文拯斷斬趙皇親

74 斷斬王御史之脏

75 仁宗皇帝認親母

49 富場判放曹國舅

傳

獅兒巷

桑林鎮

C 仁宗認母傳

包待制智勘後庭

(斷兩家人)

盒

金水橋陳琳抱粧

(斷崔護)

傳

包待制智勘釘

(雙勘釘)

實(伏)

包待制智賺三件

76 阿吳夫死不分明

F 張文貴傳

77 判阿楊謀殺前夫

白塔巷

H 斷趙皇親孫文

48 東京判斬趙皇親

黃菜葉

儀公案傳

包待制智勘後庭

(斷孫焦)

儀公案傳

包待制智勘後庭

(斷陶國丈)

儀公案傳

包待制智勘後庭

(鰲精)

儀公案傳

包待制智勘後庭

(負心郎七姐)

儀公案傳

包待制智勘後庭

(斷狂風)

儀公案傳

包待制智勘後庭

(斷孫廟鬼)

儀公案傳

包待制智勘後庭

(老鴉下狀)

包待制智勘後庭 (林昭得) 78 兩家願指腹爲婚
(斬魯皇親・斷魯官人) 92 斷魯千郎勢焰之害
(斷陳通判) 59 東京決判劉駙馬
(老鴉下狀)

包待制智勘後庭 (斷兩家人)

包待制智勘後庭 (斷崔護)

包待制智勘後庭 (斷孫焦)

包待制智勘後庭 (斷陶國丈)

包待制智勘後庭 (鰲精)

包待制智勘後庭 (負心郎七姐)

包待制智勘後庭 (斷狂風)

包待制智勘後庭 (斷孫廟鬼)

包待制智勘後庭 (老鴉下狀)

包待制智勘後庭 (雙勘釘)

包待制智勘後庭 (阿吳夫死不分明)

包待制智勘後庭 (判阿楊謀殺前夫)

包待制智勘後庭 (仁宗認母傳)

包待制智勘後庭 (張文貴傳)

包待制智勘後庭 (斷趙皇親孫文)

註一、この表は、「成化說唱詞話」所收の包公説話の授受關係を示すものである。
二、「成化說唱詞話」欄の括弧内は、既佚ではあるけれどもB、C、Eにその存在を示唆されるものである。
三、『百家公案』欄の各篇目の上に付した數字は、その作品の收められる「回」數を示す。